

# 一人ひとりを大切にした表現活動 その1

## —文京幼稚園における表現活動の実践—

宮内 太一\*・益田 薫子\*・大勝 愛\*・坂本 絵梨子\*  
入江 沙耶佳\*・横溝 文\*・岡泉 英子\*・室井 眞紀子\*  
田中 香織\*・中辻 梢\*

**Key Words:** 幼稚園, 表現活動, 子ども劇場, オペレッタ, 劇ごっこ

### I章. はじめに

本園では、文京学園の教育理念である「誠実」「勤勉」「仁愛」を「生き生きと元気に遊ぶ子」「一生懸命がんばる子」「やさしく助け合う子」に読み替え、教育目標として保育を行っている。この目標のためには、子どもに「自分を表現できる力」を育てていくことが重要と考えている。

幼稚園生活において子どもが表現できる場面は数多くある。例えば、歌を唄う、音楽や言葉に合わせて体を動かす、絵画・製作など道具を使って作品を生み出す、などさまざまである。こうした場面において、子どもたちが表現することの楽しさや喜びを知ることが重要だが、先ず「ありのままの自分を出せる」環境を提供することが必要だと考える。そのために、本園では子どもたちが安心して自分を出せる場を保障していくことを援助の留意点として日常の保育を行い、具体的にはそれぞれの学年に応じてさまざまな形で表現を楽しむ機会を設けている。

本園の教育課程においても、3歳児学年の2学期には「みんなで歌ったり、踊ったり、走るなど多くの友だちと一緒に活動する場を設ける」を環境構成の要点に挙げている。日常保育において表現する経験を数多く積み重ねることで、どの子どもも少しずつ自分を表現することに慣れ、多少個人差はあるものの「もっと表現してみたい」との気持ちを育てることになると考える。さらに、学年の友だちと一緒に体を使って表現する楽しさを味わう機会として、また1年間の表現活動のまとめとして本園では「子ども劇場（発表会）」という行事を行っている。（以下、子ども劇場と記す）内容は、学年単位で劇ごっこやオペレッタを作り上げ、例年2月

---

\*文京学院大学文京幼稚園

中旬に保護者を招待して園のホールで発表している。この活動については、どの学年も本格的には1月から約1ヶ月の期間をかけて取り組んでいる。

学年単位で取り組む理由は、幼稚園生活の経験がようやく1年の3歳児学年、約2年間経過した4歳児学年、3年間さまざまな経験を積んできた5歳児学年では、それぞれ経験による差が大きいためである。子ども劇場は各学年での経験が3年間蓄積されることで、結果として子どもたちに自身の手でひとつのものを作り上げる力が養われると考える。

一方、子ども劇場は保護者にとって1年間の子どもの育ちを感じてもらう貴重な機会にもなっている。参観者は園児の両親に留まらずに祖父母・きょうだいなど年々増加しているため、10年程前からは、木曜日から日曜日までの4日間を使って学年を分けて子ども劇場を実施するようになった。木曜・金曜は、初めて舞台に立つ3歳児学年が観客を意識し過ぎることないよう配慮し通常保育の中で発表を行っている。

## 1. 子ども劇場の変遷

本園での子ども劇場に向けての取り組みはこれまでの20年で様々な変遷があった。開催当初は、保育者が幼児向けのオペレッタ用教材として市販されている作品を選び、ほぼ原典どおりに指導していた。その後年数が経過するにつれ、どの学年も担当保育者がその年の子どものカラーに合わせてオリジナル作品を創作するようになっていった。

それぞれの作品内容は、保育者により子どもが興味・関心を持つテーマやストーリーが選ばれる。展開方法の一例を挙げると、子どもの好きな歌を選びその歌詞の中からキーワードを決める。そのキーワードを元にして、「お話の世界」をストーリー立てにしていく。架空の人物から学年の子どもたちに手紙が届いたり、時には保育者が架空の人物になりきって登場したり、といった展開をしながら約1年をかけて表現活動を作り上げていくのである。このように表現活動の基となるテーマはその学年が始まる年度初めには保育者が決めておき、そこから1年間園行事の取り組みも保育者が主導となって子どもに働きかけていく。子どもが好むファンタジーの世界であり、それを生活の中に取り入れていくため導入から舞台の完成まで子どもたちに強制感や威圧感を与えることはなく、常に楽しい雰囲気の中でストーリー展開していく良さはある。しかしながら、現在の幼稚園教育要領に求められる「生きる力の基礎を培う」ことを基盤に、子どもの主体性を大切にしたい表現活動の取り組み方を見直す必要性が出てきたのである。

## 2. 平成19年度子ども劇場の取り組み

平成19年度の実践例について述べる。3歳児学年は簡単なストーリーの劇あそび、4歳児学年はセリフを音楽でつなげたオペレッタに取り組んだ。これらの内容は、学年担当の保育者がその学年の子どもの興味や関心に合わせて創作したオリジナル作品であり、子どもたちは演じることを楽しんでいる。5歳児学年はこうした2学年での経験があるため、子どもたち自身

が保育者と一緒にストーリーを考え、子ども同士が話し合った意見を取り入れ、大道具も一緒に作り、オペレッタを完成させた。5歳児学年においては教育課程の中でも「友だちや保育者と考えを出し合い、話し合いながら遊びや行事などを作り上げていく」というねらいを1学期から掲げて実践している。

本園の平成19年度クラス編成と保育者の人的配置を以下に示す。また、子ども劇場に向けて各学年共、意図的なグループを編成しているため、形態とねらいもここで述べることとする。

### (1) 3歳児学年

1クラスが22～23名の全3クラスである。保育者は1クラスに担任1名が固定であるが、学年で計3名の保育補助教諭がおり、ローテーションでどのクラスにも入るチーム保育を行っている。

子ども劇場に向けては、学級ごとに友だち関係を考慮した上で1/2に分けてa・bグループを作る。aグループ同士、bグループ同士を合わせた30数名の2グループを編成し、劇ごっこに取り組み、発表を行う。

●ねらい ・個を大切にし、表現を楽しむ。

・年中組進級に向けて、他クラスの友だちや保育者とかかわりを持ち、大人数で活動することを経験する。

### (2) 4歳児学年

1クラスが31～32名の全2クラス編成である。保育者は1クラスに担任1名が固定であるが、学年に1名学年付教諭を配置しており計3名でチーム保育を行っている。

オペレッタは発表当日までクラス毎に取り組む形態がここ数年定着していたが、子どもが動きを創作する活動を学年全体で取り組む試みを行う。チーム保育を活かしてクラス解体をし、役ごとに3グループに分かれて動きを考え、できたものをクラスに持ち帰り、その後はクラス単位で発表できるよう作り上げていく。

●ねらい ・自分なりの表現を楽しみ、友だちと共感しながら、表現活動を行うことを経験する。

### (3) 5歳児学年

4歳児と同様に約30名の全2クラス編成である。保育者は1クラスに担任1名が固定であるが、学年に1名学年付教諭を配置しており計3名でチーム保育を行っている。

オペレッタは学年合同の約60名で発表当日まで一つの作品に取り組む形態が定着している。全体の中で、5役に分かれて約30分の大きな作品を作り上げている。

ほぼ全員の子どもが、4歳児学年でオペレッタを経験しているため、それを活かして役ごとに話し合いながら動きを創作して活動を進めていく。

●ねらい ・学年の中で、友だちと話し合いながら表現活動を行い、観客に見せることも意識した発表を行う。

今回の研究では、本園における「平成19年度の表現活動の実践」を学年毎に取り上げる。

どの学年も子どもの自発的な気持ちや行動を大切にしていけることを基本とし、それぞれの年齢に合った展開方法を模索しながら子どもと保育者と一緒に舞台を作り上げていく。この活動を通して子どもたちに育つものは何かを中心に考察していきたい。

子ども劇場は、歌や体を使って気持ちを表したりすることに留まらず、多様な取り組みにより、人間関係の深まりや子どもが自分で考えたり自分たちの生活を作り上げることに繋がっていく活動であると考えからである。

（今年度は、「その1」として3歳児学年、4歳児学年を取り上げて掲載する。5歳児学年と全体の考察は次年度「その2」で発表する予定である。）

（益田 薫子）

## Ⅱ章. 3歳児学年の実践

### 1. 平成19年度3歳児学年の表現の考え方

初めて保護者のもとを離れて過ごす3歳児の園生活は、進んで何事にも興味を持てる子どももいるが、慣れない環境に戸惑い、周りの様子を伺うなど、泣くことや傍観することでしか自分を表現できない子どもが大多数である。

そこで、個々に異なる子どもたちの興味関心をいかに引き出し、それぞれが自分の感情や思いを表現することができるようにするためにはどうすべきかを3歳児学年担当の保育者で話し合い日々の保育で意識すべき援助方法や視点を共有してきた。その具体的方法を次に挙げる。

- ① 3歳児の園生活で大切なことは保育者との信頼関係を築くことである。自分を丸ごと出しても受け止めてもらえることで安心感を抱き、自分の思いを外に表すことが豊かな表現につながる。
- ② 活動への参加の仕方は様々で良い。体を動かすことが楽しい子どももいれば、周りの子どもや保育者の様子を見て楽しむなどそれぞれ異なる。そのため、それぞれがその場で何を楽しんでいたのか保育者が捉えていくことを大切にする。また、興味の移り変わりや変化を見逃さないためにも、毎週末に個々の記録をまとめていく。
- ③ 子どもたちに刺激を与えるために保育者が導入した表現遊びだけでなく、子どもが日々行っているごっこ遊びの中にある自然な表現を拾い上げ、保育や行事に取り入れていく。

次に事例を挙げ、個を大切に組みこんできた表現活動の実践から子どもたちに見られた変化や成長について考えていく。

#### 【事例1】表現活動を楽しんだことで、自分を開放できたA男

入園当初は新しい環境に強い不安感を示し、自ら興味を持って活動に参加する意欲が見られず、常に周りの目を気にするなど、園生活を楽しむことがなかなかできずにいた。

2学期になり、担任の傍にいて安心して、そこから少しずつクラスにも馴染んでいくことができたが、友だちの中に入って遊んだり活動したりすることには躊躇する姿が見られた。

3学期に入り「おでかけごっこ」と称した表現遊びを展開していく中でA男に変化が見られ始めた。自由な隊形になり表現遊びをしていたが、それは決まった動きがあるのではなく、1つの動物になるのもどんな動きをしても構わないといった活動であったが、その際保育者の目があっても取り組むことができたのだ。こちらの投げかける言葉にいち早く反応し、楽しむ姿も見られるようになった。また、友だちに対してはスキンシップがうまく出来ない姿があったのだが、遊園地の乗り物になりきる表現活動を行った際には、何の躊躇もなく自ら友だちと手を繋いで回ったり、背中につかまって走ったりといった姿が見られ、その表情は今まで見たことのない生き生きとしたものであった。A男が初めて心から楽しいと気持ちが動いた一瞬だったのではないだろうか。

### 【事例2】表現を通して、徐々にところが開放されたB男

B男は入園当初、母子分離が難しく母親を思い出して泣いたりすることがあった。表現遊びを恥ずかしがり周囲の目を気にしすぎて参加しないことが多かったが、保育者もなるべく声をかけ誘うなどしつつ本人の意志を尊重し、様子を見ることにした。2学期の運動会ではいつもとは違う雰囲気緊張していた。リズム表現の時は踊らなかったがクラスの輪の中に入り、参加することができた。その緊張を乗り越えられたからなのか、その後、自分を表に出すことが徐々にできるようになった。

子ども劇場のグループ活動では、やはり羞恥心があるのか傍観するのみであった。保育者が「一緒に来てごらん」と声をかけると、参加はしないものの集団の中へ集まることができた。何度かグループでの表現遊びを経て、友だちのF男などと皆の表現を「面白いね」と笑うようになった。集団で繰り返し表現活動をするうちに、B男なりに流れを理解し友だちと笑い合いながら舞台に立てるようになっていった。最終的に、少しだけ手を動かしてみたり、照れ笑いしながら音楽に合わせて口を動かしてみたりする姿が見られるようになり、自分なりに表現ができるようになったのである。

上記の2事例から、なかなか自分の気持ちを表現するのに抵抗があった子どもたちが、前述の一連の表現活動を体験する中で、どんな姿を出しても受け止めてもらえる安心感を味わえたことで、自分自身を開放することができたのではないだろうかと推測される。そして、そのことがきっかけとなり言動や行動が意欲的な姿に変化し、友だちへの積極的なかわり方へと繋がった。表現活動が子どもの中に眠っていた力を引き出してくれたのだと実感した。保育者が意識を持ってかかわっていくことで、子どもたち一人ひとりの思いや行動の充実に繋がりが、表現活動にも変化が見られた。その中で、特に子どもたちから人気のあったカエルの表現遊びについて詳しく取り上げてみようと思う。

### 【事例3】カエルの表現遊びでの子どもたちの変化（5月末～7月末）

入園当初から様々な遊びを行うことで、初めての集団生活への不安や緊張を取り除き、園生活への期待や興味、落ち着きが持てるよう配慮してきたが、この時期に合った「カエルの体操」を投げかけた。始めは保育者と共に体を動かす子どももいれば、保育者の踊る姿を目で追って

いるだけの子どももいた。そのような中徐々に変化が見られていく。曲や歌詞の面白さが子どもたちの興味に結びつき、一日に何度もやりたがる姿が見られるようになった。カエルの体操が始まると、他者に関心がなかった子どもも体操をしている保育者や友だちに目を向けるようになった。また、気持ちの切り替えがなかなかできなかった子どもも体操をすることを楽しみに、期待を持って片付けを行うようにもなった。多くの子どもがこの体操をきっかけに表現を楽しむことができた。そして体操で終わらせるのではなく、子どもたちの興味を更に広げ、子どもがなりきってより楽しめるよう活動を発展させ、カエルの帽子作りを行うことを考えた。子どもたちの作った帽子は、笑っているカエル・困っているカエルなど様々な表情のカエルが見られ、個々に楽しんでいる様子が見られた。また、「わたしのカエルはね、笑っているの」と保育者に伝えにくるなど、思いを込めて作っている様子も見られた。

自分で作ったカエルの帽子に愛着を持ち、乱暴に扱う子どもはいなかった。カエルの帽子は子どもたちがいつでも使えるよう保育室内にカエルの帽子置き場を作ると、体操の時だけでなく室内遊びでもかぶってカエルのお店屋さんごっこをする様子や、昼食時も身につけている姿も見られた。中には登園時から降園時まで帽子をかぶる子どももおり、一人ひとりが様々な場面でカエルになり、繰り返し楽しむ姿が見られるようになった。

以上のように、3歳児学年では作ったり、歌ったり、遊んだり、飾ったりと様々な形で表現遊びを楽しんできた。一つひとつの体操や表現遊びが単発にならず、一連の繋がりを持って活かしていけるよう心がけてきた。

## 2. 子ども劇場に向けての取り組みの留意点

3歳児学年では、子ども劇場に自然な形で表現遊びを繋げていけるよう、子どもたちの楽しんでいることは見逃さないように表現遊びを重ねてきた。動物や生き物、乗り物に変身することで個々に表現遊びを楽しんでいた子どもたちも、友だちや保育者と共に動き、表現することの心地よさを味わうようになっていった。そこで何かに変身してそれを表現するだけでなく、「おでかけごっこ」という形で動物や生き物に変身し、遊園地や公園など様々な所に出かけるというストーリー性を持った表現遊びも取り入れた。また、雨が降ったり転んだりとアクシデントを起こすことで、子どもたちの動きもより自由にのびのびしたものに変わっていった。

次に日常の表現活動から子ども劇場に移行した際に意識して取り組んできたことを挙げる。

### (1) ストーリー作り

日常楽しんできた遊びや歌を取り入れ、子どもたちの興味や関心に向け離れないストーリー展開にするということを意識してきた。

まずは保育者同士で子どもたちの姿を振り返り、反応の良かった手遊びやゲーム、子どもたちから自然と発生した遊びなどを挙げて話し合った。そうすることで年間を通して子どもたちが楽しんできた遊びや興味が見えてきたため、園内の様々なコーナーで多くの子どもたちが楽しんでいた「お店やさんごっこ」に焦点を定めた。

話の展開や役柄は分かりやすく簡単なものを取り入れた。また、反応が良かった手遊びやリズムを取り入れることで親しみと開放感を持って楽しむ姿が見られた。

以上のようなことを心がけたことで、一人ひとりが面白いと思ったり気に入ったりした場面、何度でもやりたい場面（表現）ができてきた。

#### 【事例4】繰り返し楽しんだ手遊び（お店やさんごっこ）

6月頃より、お店やさんごっこの遊びがあちらこちらで展開されるようになった。そのため2学期の運動会のリズムや競技に「お店やさん」をテーマにしたものを取り入れたり、手遊びにも「お店やさん」が出てくる内容を取り入れたりした。2学期後半になり手遊びの回数を重ねると、子どもたちから「今度はおかしやさんがいい!」「おもちゃやさんがいい!」などリクエストが聞かれるようになった。

3学期になり子ども劇場のストーリー展開にも、子どもたちが買い物に行く場面にクイズ形式を取り入れたことで、毎回違う展開に面白さと期待を持って取り組む姿が見られた。

#### (2) 安心感の中で表現を経験する

実際に役（動物）の表現をする時には4つ足になることでなりきる子どももいれば、鳴き声を出す子ども、手で耳・尾を表現する子どもなど、表現方法や楽しみ方はそれぞれ異なっていた。そこで保育者から表現方法を示す場合は一つの例として紹介することに留め、子ども自身が感じるままに動くことを大切にしてきた。その中で表現活動が思うように楽しめない子どもにとっては、保育者の動きを例として見ることでやってみようという気持ちになり、次の表現にも繋がっていった。また、子どもたちから出た表現方法を全体にフィードバックしていくことで、一つの動物や場面でも様々な表現方法があるのだということを伝えていった。

#### 【事例5】浸透していった子どもの表現

3学期になり、はじめは保育者の動物の動きを模倣して楽しんでいた子どもたちであったが、回数を重ねたある日、遊園地の表現遊びをした際に、メリーゴーラウンドやジェットコースターなど動きの大きいものはどの子どもたちもイメージがつかみやすいようですぐに反応し楽しめた。しかし「観覧車に乗りたい」というリクエストには保育者自身も動きが止まり、子どもたちに問いかけるということがあった。すると、数名の子どもたちが保育室の扉の枠につかまり、園庭をじっと見ている。保育者が声をかけたところ、「観覧車に乗って外を見ているの。」と反応が戻ってきた。その姿を保育者が提案することで、他の子どもたちも歓声を上げてやってみる姿が見られた。保育者自身も、大きく動くことだけが表現ではなく、なりきる気持ちも大切だと改めて感じさせられた事例であった。

#### (3) 共に動くことの心地よさ

子ども劇場の頃（2月）になると、他者の存在を意識し友だちを求めるようになっていた。役に分かれる時に、自分の意思とは違っていても気の合う友だちと同じ役になりたがったり、真似をしたがる姿も見られるようになった。

そこで、自分が表現遊びを楽しむだけでなく他者の表現を見ることで、友だちの姿にも目が

向く機会を用意した。すると、表現遊びを楽しむ友だちを見て応援する子どももいれば、喜んだり心配したりと、場は異なっても共に楽しんでいるなど、子どもたちの心が動いている様子が見られた。次第に見ている子どもたちも共に歌を口ずさみ、体も自然と動き出していた。このような子どもたちの姿を受け、ストーリーを展開していく中で個人の自由表現を大切にする一方、友だちや保育者と同じ動きを楽しむような場面も取り入れ共に動くことの心地よさも味わえるよう配慮した。

#### 【事例6】心が連動していた子どもたちの姿

日常の保育の中では、おばけを登場させて遊んだり、おばけが出てくる歌を繰り返し楽しむできた。おばけの登場曲を聴くことで子どもたち同士声を掛け合ったり、「キヤー怖い！」と同じ思いを味わう姿が見られた。そのため、ストーリー展開のひとつとしておばけが登場し、おばけに惑わされずに無事に戻ってくるという場面を用意した。すると子どもたちの中から「やっつけなきゃ！」との共通の思いが感じられ、表現する側だけでなく見ている側の子どもたちも同様におばけとの対決に真剣になり、応援したり、驚いたり心が連動する姿が見られた。

以上のように、子どもが様々な場で自分をアピールできるよう保育者は意識を持って取り組んでいった。個の充実が友だちとのかかわりや共に表現する喜びに繋がり、更には子ども劇場の楽しさにも繋がっていった。

### 3. 活動を通しての子どもの育ち

先に述べた個の充実を大切にしたい次の段階として、友だちに対する興味・関心が強くなる3歳児学年後半の時期、馴染んだクラスのメンバーとだけでなく、新たな友だちと活動を共にすることで、様々な人がいることを知り刺激をもらうことができる。そして次年度クラス替えをする子どもたちが違うクラスの友だちと人数が増えた中で過ごすという擬似体験を味わい、新しい生活にスムーズにとけ込めるようになることをねらいに、3クラスの子どもたちを2つの混合グループにし子ども劇場に参加している。また保育者も担任だけでなくチームを組み、複数のメンバーで担当することで子どもたちを多角的に捉え、今まで見えていなかった部分、新たな子どもの姿を発見し、情報を共有しながら人間関係を広げることをねらいとした保育を展開している。このことは2月に行われる子ども劇場間近にいきなりクラスを解体した訳ではなく、日々の保育に計画的に取り入れてきたのである。その具体的な活動内容を次に挙げる。

- ①年間を通して、歌や体操、行事など様々な保育の導入や誕生会などを通して、3クラス合同で活動する機会を設けた。
- ②各クラスに入るフリーの保育者を固定にせず、ローテーションを組んで、担任以外にも多くの保育者にふれる機会を作ると共に、保育者側も子どもを多くの目で捉え偏った見方にならないようにしてきた。
- ③園庭にコーナーを設定し、3クラスが自由に行き来し、他クラスの友だちともかかわりなが



ら製作活動や遊びに参加できるような機会を作ってきた。

- ④雨天時には室内2クラスをオープンにし様々なコーナーを設定し、3クラスが混ざり合って遊べるようにすると共に、保育者もクラスに拘らず、各コーナーの担当に分かれて子どもたちとかわかってきた。
- ⑤2グループに分かれての表現活動が始まると、その時だけでなく昼食時や食後の室内遊び時も2グループで生活する時間を作ってきた。

3学期に入ってから表現活動の時間は、学年全体を固定の2グループに分けることになる。その際にはその子どもの実態をしっかり見つめ、個々が必要としている配慮点を探りグループ分けをする必要がある。保育者が共通にしたねらいを具体的に挙げてみる。

- ・自分の表現を表に出すことが苦手な子どもが、組み合わせのメンバーにより影響を受け、表現力が開花するきっかけとなしてほしい。
  - ・グループ活動をすることで、子どもたちの中には拘っている関係から、人間関係を広げてほしい。
  - ・ダイナミックに表現できる子どもとそうでない子どもがミックスされることで、自分を出し切れない子どもが刺激を受け、表現する面白さや心地よさを味わうきっかけになってほしい。
- 次に事例を取りあげ、保育者のねらいとそのグループで活動した際の子どもの姿、またその子どもに何が芽生えたのか事例を通し考察したいと思う。

#### 【事例7】友だちに刺激をもらい、自分を出せるようになったJ子

##### (1) 子どもの姿の変化から、グループ分けの配慮点

他児に混ざって遊ぶよりも、ひとりで静かに楽しむことを好んでいたJ子は要求や思いを表に出す姿が殆ど見られなかった。

2学期になると保育者とのかかわりを求め、共に遊ぶことを通して他児ともかかわる機会が出てきた。その中でJ子に関心を持っているK子とL子が盛んに遊びに誘って来るようになるが、この頃J子の友だちに対する意識に変化が見られるエピソードが起きた。1学期から身支度に時間がかかる姿が見られ、保育者も励ます声かけをしたり、支度を終えて遊んでいる子どもの様子を見せたりして来たがなかなか変化しなかった。しかし、友だちに関心を抱くようになって来ていると感じていた保育者がある日、以前のように周りの友だちが支度も終え、遊んでいる様子を意図的に見せたところ、「私も遊びたい」と泣き出した。それまでには無かったJ子の姿であり、本児の中に自分だけが取り残される不安や友だちに対する興味・関心が芽生えてきているからこそその涙であったと思えた。

かかわりを持つようになったK子とL子は普段からごっこ遊びでなりきり、他児に刺激を与えていた。友だちにも関心を持つという変化がJ子にも感じられるようになっていたので、この2人と共に活動する環境に置くことで、J子が表現する楽しさを知り、そのことが自信に繋がり、もっと自分の思いを表に出すきっかけになってほしいというねらいからJ子をK子、L子と同じグループに入れることにした。

## （2）グループ活動での様子とその後の変化

グループでの表現活動が始まると、クラスとは違うメンバーに始めの頃は緊張していたものの K 子・L 子と同じ動物になり、2 人の動きを模倣して表現するようになった。表現活動の前半は模倣したり、K 子や L 子にリードしてもらうことで安心して楽しむ様子でいたが、後半になるとゾウ役が気に入り、仲間が少なくても最後まで楽しんで取り組むようになったり、2 人に拘らず日々役を変えて楽しめるようになった。また、遊びの中に自ら「入れて」と仲間に加わったり、クラスみんなの中で発言をするなどこれまで集団の中では一步引いていた J 子が、自らの思いや要求を言葉や行動に出せるようになってきた。グループ活動での K 子、L 子とのかかわりが J 子に自分を出すきっかけとなったのではないと思われる。子ども劇場終了後は、様々な友だちに対しても自分の思いを出したいが思うように出せないもどかしさを感じている様子が見られたので保育者が仲介に入り、伝える時の手助けにまわるよう心がけてきた。

### 【事例 8】主張が強く、他児とのトラブルがよく見られた M 子

#### （1）子どもの姿の変化からグループ分けの配慮点

M 子はクラスの中でも主張が強く、自分の意見が通らないと泣いたり喚いたりして自分の思いを通そうとするところがあり、相手にうまく思いが伝わらないと手が出てしまうことがよく見られた。2 学期に入りままごとコーナーで遊ぶことが好きな M 子は、そこで N 子と物や場所の取り合いが原因で言い合ったり押し合ったりするなどのトラブルが続いた。「どうしても許せない」という本気の頑固な態度が、余計に両者に亀裂を生じさせていた。その都度保育者が仲立ちして話し合う機会を設けたが、なかなか良い方向にはいかなかった。

保育者は意図的に M 子を N 子とは別のグループに入れ新しい交友関係が構築できることを期待し、自分から積極的に友だち関係を広げ新たな視野で友だちに接することができるようになってほしい、という保育者のねらいをもとにグループ分けをおこなった。

#### （2）グループ活動の様子とその後の変化

元々積極的に遊びこむことのできる M 子は、交友が見られる O 子を軸に、他クラスの女児らと交友を深めていった。園庭では、クラスの枠を越えて積極的に話しかけたり、笑顔で一緒に走り回る姿が見られるようになった。N 子とはグループが別々であったため、程よい距離を置くことができ、子ども劇場後は言葉を交わしながら同じ場所で遊ぶことができるようになった。

前述の 2 事例は、保育者がその子どもの実態を捉え、何が必要であるのか明確なねらいを持ち、グループ活動を展開し、その子どもたちの姿を読み取った。どの子どもにも一人ひとりに保育者がねらいを持ち、グループ活動をしてきたのだが、その中で保育者が予想していた以上の嬉しい変化・成長が見られた子どもたちがいた。次にその事例を挙げる。

### 【事例 9】他者を受け入れ、自分の世界が広がった P 子

4 月からクラスでは活発に遊べる P 子だったが、3 クラスでの合同活動などクラスを問わず

遊ぶ場面では、他クラスの子どもがたくさん傍にいることに不安を覚え、泣き出し遊べなくなってしまう姿が続いた。2学期になり友だちにも興味、関心が高まってきたが、特定の友だちに拘る所があり、他クラスの友だちとのかかわりに不安な姿を見せることはまだ続いていた。P子自身は表現遊びが好きであり、どちらかというグループをリードするタイプの子どもであったが、新しい環境・顔ぶれに強い抵抗を示すことが予想できた。

グループでの活動を始めた当初は緊張している様子であり、クラス内で見せているようななりきる姿は見られなかった。しかし担当保育者の中に担任がいたことで、回数を重ねる毎にグループに馴染み、笑顔で参加できるようになった。後半では、先頭に立って登場したり、劇中の歌は身振り、手ぶりを大きく付けて取り組む姿に他児も刺激を受け模倣する姿が見られた。この頃は表現活動の時だけでなく昼食や食後の室内遊びもグループで過ごしてきたが、躊躇することなく他クラスの友だちともテーブルを自ら囲めるようになっていたり、自分と同じ物を好む他クラスの友だちに親近感を持ったりするようになり、以前のように泣くことがなくなった。

これまで特定の友だちと遊ぶことに拘っていたP子であったが、今回のグループ活動の中で様々なタイプの友だちとかわる経験をし、頑なだった友だちへの拘りが解け、P子の世界が広がったと考えられる。

#### 4. 2 グループに分かれて表現遊びに取り組んでみた結果

今回、3クラスを2つのグループに分けて取り組んだことにより得られた効果は以下の3点である。

- ①自分の要求や思いをどの保育者にも活発に伝えられるようになった。
- ②遊びの輪が広がり、クラスに捉われずに「入れて」と参加できるようになったり、他クラスの友だちと親しみが持てるようになった。
- ③保育者側にとっても、来年度に向けてのクラス編成の貴重な資料となった。

①では、子どもたちは今まで馴染みのなかった他クラスの保育者とはなかなか打ち解けられなかったり、自分の思いを我慢してしまったりする姿があった。しかしクラス解体を経て、困ったことがあれば担任でなくても近くにいる顔馴染みのある保育者に自分の要求や思いを伝えられる子どもが顕著によく見られるようになったのである。グループ活動を行うことで、担任だけでなく様々な保育者に親しみをもち、より人間関係を広げることができたのではないかと推測される。

②では、3学期に入り、自分のクラスの友だちだけでなく、他クラスの輪の中に入っていけたり、積極的に「遊ぼう」と声をかけたりすることができるようになってきた。様々なクラスの友だちがいることを知り、幅広い交友関係を持つことができるようになったのである。

そして③では、2グループに分けた子どもの姿の中に「この子どもとこの子どもは相性が良い」「この2人は少し距離をおいて様子を見た方がよい」というような交友関係を知ることができ、4歳児学年に進級する際の重要な資料となった。実際に子ども劇場での交友関係を配慮

し、クラス編成を行った例も数多くあった。

## 5. まとめ

同じ活動を展開しても変化や成長が一人ひとり違って来るように、表現とはそれぞれが楽しいと感じる所や興味の持ち方に違いがあって当然である。本園でも、1年の生活発表の場である子ども劇場は、普段の表現遊びの延長線上にあると考えて取り組んではいるが、活動が進むうちに表現遊びを子どもが「課題としてこなす」ものになってしまっていないか反省をする。やらされるのではなく、心からの表現ができること、それが理想ではあるがなかなか難しい。しかし、今回の1年間の取り組みにおいて私たちが実感したこととして、表現とはそれだけで切り離して成立するものではなく、園生活の中で個が充実していることが安心して自分自身を他者の前で出せるようになり、そこで初めて表現活動が楽しめることに繋がるのだ。そのために私たち保育者は、一人ひとりの興味、関心に合った活動の提供、一人ひとりに寄り添った援助の積み重ねをどれだけしてきたのかが問われる。ただし、それは担任だけでは難しい。担任と学級に拘った保育ではなく、学年複数いる保育者がチームを組み、広い視野で子どもたちを捉えていくことも必要になってくる。その視点から本園の3歳児学年では、4月からクラスの枠を超えた3クラスでの合同活動、クラスを問わず壁をオープンに広げた保育室で遊ぶ活動を計画的に行い、グループでの表現活動へと展開している。しかし、子ども劇場でのグループ活動に向けて期間限定で単発的ではなかったのかと問われれば、その事実は否めず、反省すべき点はあった。今回のグループで活動を展開する中で、子どもたちの様々な変化を垣間見ることができたことから、長期的な見通しを持ち、また様々な組み合わせのグループによる活動を初期段階から積極的に組み込んでいく必要があると思われる。

また、子ども劇場という行事は3歳児学年にとって初めて体験するものであり、一体どのようなことをするのか子どもがイメージすること自体難しいものである。しかし今回、子ども劇場に向けての様々な表現活動を行ったりグループごとでの表現活動を経験したりする中で、子どもたちは音楽や歌に合わせ、体を動かす楽しさをまず自分自身が味わい、その次の段階として保育者や他の子どもたちと一緒に表現することを心地良いと感じるようになってきた。そして、そのような中で自分以外の友だちの存在を知り、共に活動することに喜びを感じたり、一緒にいたいと思うようになってくるのである。今回の表現活動の実践を通して、表現活動はそのもの自体を楽しむだけでなく、人と人のかかわりが大きく、3歳児学年にとっては表現体験をしながら実は、1年をかけて人間関係を構築しているのではないかと考える。つまり、人間関係の土台を築くことにも繋がっており、3歳児学年の表現活動の充実がこれからの4、5歳児学年の生活の基盤となっていくものであり、この1年が改めて貴重な時期であることを再確認できた。

（岡泉 英子，中辻 梢，横溝 文）

### Ⅲ章. 4 歳児学年の実践

「はじめに」で触れたように、本園では平成 19 年度より、子どもたちが自分たちの力で生活や活動を作り上げていくことをねらいとし、子ども劇場への取り組み方も変える試みをした。

そこで今回の紀要研究では、前年度までの取り組みの様子と今年度の新たな取り組みを通して子どもたちが経験し、子どもたちの中に育ったことなどについて実際の事例を上げながら考察してみた。

#### 1. 4 歳児学年における平成 18 年度までの取り組み

平成 18 年度までは、その年によって多少の違いはあるが、主に保育者が年度初めに立てたテーマに沿い、1 年間子どもたちが楽しめる保育活動を展開し、そのテーマに出てきた空想の人物とのやりとりや出来事をメインに子ども劇場のストーリーが作られていた。子ども劇場への活動の導入などが空想の出来事などから行われていた理由には、子ども劇場という舞台に立つことが得意な子と苦手な子がいたからである。得意な子や好きな子はすぐに役になりきり活動に積極的に参加していたが、苦手な子や興味がない子は活動を嫌がり、消極的な姿が見られた。そのような子どもたちを見て、どうしたら楽しく、練習という意識を持たずに参加できるのかを考え、このような空想の人物や世界で楽しむことで子どもたちがその世界に入り込み、気持ちを盛り上げる事ができるような活動の流れに変わっていったのである。その結果、舞台上で人前に立つ事が苦手な子やオペレッタに興味の無い子でも、行事以前から保育者の設定したテーマの世界に入り込むことで、構えることなく「オペレッタを発表することができた」という自信を持ち、楽しく参加することができた。また、1 学期、若しくは 2 学期から自分たちが行ってきたことが題材となっているのでストーリーに対して親近感があり気持ちが入りやすとの長所があった。しかし、架空の人物とのやりとりの期間が長いので、「保育者が行っているのでは」と疑問を抱く子や、中には飽きがきて最初の時期より興味が薄くなる子がいるなどの短所も挙げられた。また、年度始めにテーマや流れを保育者が決めるため、その年度の子どもの興味関心に必ずしも沿った内容ではなく、且つ、子どもが自分たちで考えたり、創り上げたりするという経験ができにくく、保育者主体の活動になってしまう傾向があった。

#### 2. 平成 19 年度の試み

平成 19 年度は、「子どもたちが主体的に取り組めるように」という 1 年間の大きなねらいを基に、「個の充実」や「一人ひとりの経験を大切に」など、今までの保育活動で私たちが大切にしてきた事を活かしながら、以下のように子ども劇場のねらいを設定した。

#### 4 歳児学年の子ども劇場のねらい

- ・自分なりのイメージを持ち表現する楽しさや、イメージを具体化する喜びを知る

・友だちと一緒に共感しながら、活動を行う喜びを味わう。

具体的には3つのポイントを挙げ、クラスという枠に捉われず、活動をスタートさせた。

#### (1) ストーリー作り～子どもの姿や遊びを読み取る～

子ども劇場という活動を日常の表現活動のひとつと位置付け、以下のねらいのもと、ストーリーは子どもたちの普段の姿や遊びの中で好きな事、興味関心のある事（今年度は昆虫）を拾い上げ、子どもの生活体験に根ざした内容にした。

<ねらい>

- ・ストーリーの内容に興味・関心を持ち、共感する。
- ・ストーリーや登場人物を身近に感じ、一体感を持つ。
- ・五感を使って考え、感じた事を自分なりの方法でのびのび表現し、楽しむ。

#### (2) 導入・振り付け～チーム保育を活かして～

実際の発表はクラスごとだが、以下のねらいの下導入や振り決めは両クラス合同で行った。

<ねらい>

- ・他クラスの子どもとかかわることにより、交友関係が広がり、又、互いを刺激し合える。
- ・担任以外の保育者と触れ合うことができ、保育者は新たな子どもの姿を発見できる。
- ・ストーリーを体感することにより、流れや話の内容を五感で感じ取り、覚える事ができる。

#### (3) 役のイメージ作り～日常の個の経験を活かして～

これまでの保育では個が遊びを通して自己充実できるよう、自分の好きな遊びや、やりたいことを自由に納得するまで行えるよう、様々な遊びのコーナーを設け、色々な素材を用意し、そのための時間を十分に保障してきた。つまり、自ら多くの経験ができるような環境構成を行ってきた。今回の子ども劇場でも、活動の中で「個の充実」と「個の経験」を大切にし、ここのねらいを以下の通りに設定した。

<ねらい>

- ・音楽に合わせ自由に表現する中で、自分の役に対するイメージを持つ。
- ・役に対するイメージを遊びの中で、音楽的・造形的に様々な形で表現する。
- ・自分のやりたい役を心ゆくまで楽しむ

今年度の取り組みでは、保育者の視点で活動を展開するのではなく、子どもの興味関心を大切にし、今まで子どもたちが生活体験してきた事を活かしてきた。

次に具体的な事例を持って、「子ども劇場」導入から本番までの取り組みを紹介する。

### 3. 実践の流れ

#### (1) 導入の様子

3歳児学年から4歳児学年に進級してからの子どもたちの様子は、「自分が1番でありたい」と気持ちが先走ってしまうことや、他人の意見を聞こうとしないで自分の意見を通そうとしてしまうこと、気持ちの切り替えがうまくいかず集まりの時間になっても遊び続けてしまうとい

う傾向があった。そのような姿から私たち保育者は、自分の意見だけを通すのではなく他人の気持ちを思いやること、やりたいこととやるべきことのけじめを学んでほしいと考え、以下のねらいの下に今回のストーリーを作っていた。

<ねらい>

- ・遊びの中で劇の内容を知り、楽しみながら劇遊びに参加する。
- ・劇遊びを楽しみながら、物語の内容を理解しながらけじめをつける大切さを知る。

今回の導入方法は、4歳児学年の子どもたち全員が園庭に出て1人の保育者がストーリーを進めていき、子どもたちを誘導させ各場所へ移動して行くという形をとった。そのストーリーの途中で登場人物に扮した保育者が登場してストーリーが展開していくものであった。以下のねらいをもとに導入で大切にすることは、子どもたちが実際に見たり、聞いたり、感じたりしながらストーリーを理解してほしいというものであった。

<ねらい>

- ・遊びの中のひとつとして楽しみながらストーリーを理解する。
- ・子どもたちが参加することで、客という立場でなく実際に動きながら発見したり感じたりして一人ひとりがストーリーを体験する。

実際の導入では子どもたちから大きな歓声があがり、ストーリーに入り込み楽しんでいるのが分かった。また、登場人物に扮した保育者に対し「だめだよ」「こっちだよ」と大声で叫ぶだけでなく実際に力いっぱい腕を引っ張り止めようとする子もおり、気持ちが入り込んでいて、内容をよく理解していると感じた。園庭での活動が終わり入室後も興奮は治まらず、保育室でも子ども同士が物語についての会話を楽しんでいた。子どもたちの捉え方は様々で、いろいろな参加の仕方があった。

#### 【事例1】ストーリーの内容を理解して、全身を使って感情を表現するA男

A男は明るく元気で活発であるが、大勢の中では少し遠慮をしてしまうことがあった。導入時、ストーリーを進めていく保育者の話に静かに耳を傾けていたが、役の1つであるバッタが誘惑に負けて遊んでしまおうとすると、周囲から「だめだよ」「こっちだよ」と止めようとする言葉が出てきた。それをきっかけにA男も大きな声で止めようとし、その気持ちから、体を使いジェスチャーでバッタに伝えようとした。それでも無視をして遊ぼうとするバッタ役の保育者に対し近付いて腕を掴み、遊ぶのを止めようとする子が出てくると、初めは躊躇していたA男も友だちの姿を見て一緒に近寄り腕を掴み止めようとしていた。その後、保育室に戻り保育者が「どんなことがあったの?」ととぼけて聞くと、「先生にそっくりのバッタが来てね」と興奮しながら一連の流れを話してくれた。その話からストーリーの内容をよく理解し、また、気持ちを十分に出してストーリーに入り込んでいるということが分かった。

#### 【事例2】冷静にストーリーの様子をみているB子

B子は他児に比べて冷静に様子を窺うことが多く、今回も周りの子が登場人物に対して言葉を発したり、体を使うなどで参加していたが、B子は後ろの方から保育者と他児との様子を見

たりストーリーの行方を静かに見つめるだけであった。活動が終わり B 子に近づいて様子を伺うと、笑顔で「先生がバッタだったでしょ！」と言っていた。

## （2）振り決めの様子

「振り決めの話し合いを経験し、振りの付け方を理解する」というねらいの下、初めに各クラスにおいてフィナーレの振り決めに子どもたちと共に意見を出し合いを行った。このことで、一通り振り決めのやり方を子どもたちが理解することができた。フィナーレの振り決め後は以下のねらいのもとに、ストーリーに登場する 3 役（バッタ、てんとう虫、神様）にそれぞれ 3 曲ずつ、計 9 曲を 3 回に渡って両クラス合同で振りを付けていった。

<ねらい>

- ・その日に自分のやりたい役を決めて、振り決めの話し合いに参加する。
- ・曲や歌詞を聴きイメージしながら、自分たちで意見を出し合う。
- ・意見を言ったり友だちの意見に同意したりして、一人ひとりが話し合いに参加する。

振り決めの流れは、まず子どもたち 64 人が 1 室に集まりその日に決める曲を聴き、その後自分が振り決めをしたい役の保育者（保育者は予め 3 役に分かれている）と共に、各場所へ分かれて振り決めを行った。その 3 回共に、その日に振り決めを行いたい役を自分で選択できる方法をとった。振り決めの方法は、保育者が歌詞の一部分を取り上げ、「‘ほくはバッタ’の部分だけど、どんな動きにしたらいいかな？」などと子どもたちの意見を聞きながら決めた。歌詞は子どもたちがイメージしやすく分かりやすい歌詞を保育者が考えて曲に当てはめていった。話し合いではどんな発言も受け止め褒めることで意見を出しやすい雰囲気を作っていた。意見が出てこない場合は、保育者から「こんなのはどうかな？」とイメージが湧くように声をかけ、子どもたちの方から「こんなのは？」と口ずさみながら披露する姿が見られた。2 回目、3 回目になると話は聞いているが、手を挙げないでじっと見つめている子どもには保育者から「今これとこれの意見が出たけれどどっちがいいかな？」と問いかけ少しでも参加できる場面を作れるように心掛けた。

### 【事例 3】積極的に手を挙げ意見を出す C 男

C 男は歌がとても好きであり、歌を使う振り決めでは積極的に参加していた。保育者の問いかけに「こんなのはどう？」と挙手をして発表することが多かった。しかし中盤になると、指されたいという気持ちから、大きな声を出して手を挙げるが、保育者に指されてから「えっと……」と考えることが増えた。C 男に対し、「考えてから手を挙げてね」と、参加の仕方を何度も伝えていった。

### 【事例 4】皆の前では発表しない D 男

保育者の問いかけに対し自ら手を挙げて発表することはしないが、保育者の話に集中して聞きじっと見つめ参加していた。他児が手を挙げて参加している中、本児はその動向を見守りながら耳を傾けていた。手を挙げ自分の意見を言う子どもが限られていたので、終盤に差し掛かった頃保育者から D 男を指し「何かいいアイデアはないかな？」と問いかけると首を傾げ



るだけであった。そのうち、他児からイメージの湧くような意見が出されると、立ち上がり多くの子どもに交じり意見を述べ始めた。D男を指し他児にD男の意見を聞くように促すと、D男自ら手を挙げてアイディアを出すことができるようになった。

### (3) 劇ごっこ遊びの様子

以下のねらいのもと振り決め後は暫くの間、好きな遊びの中で保育者がピアノを弾いたり、歌をテープで流したりし、好きな遊びの中で自由に歌や踊りを楽しめる環境を設定した。

<ねらい>

- ・遊びの中で個々が自分のペースやイメージで好きなようにそれぞれの役の表現を楽しむ。
- ・遊びの感覚で、自然に歌や振りを覚える。

歌や振りが子どもに浸透した頃、初めてクラスごとに全員参加で、ストーリーの流れに沿って「劇ごっこ」を始めた。さらに以下の点に留意し、役を固定せず色々な役を心ゆくまで楽しめるようにした。

- ①それぞれの役の面白さや良さを知って欲しい。
- ②役の特徴を体験し、理解した上で、自分で納得し、判断して役を決めて欲しい。
- ③色々な役をやる事で、あまりかかわりの無い子どもとも触れ合い、友だち関係を広げる機会となって欲しい。

子どもたちは音楽がかかるとすぐに集まり、友だちと一緒に歌詞カードを見ながら歌い、自分たちで考えた振りを踊る子、輪の中に加わらずとも遊びながら他児の踊っている姿を見て楽しむ子、自分の好きな曲が流れると遊びを中断して表現の輪に加わる子など、様々な形で表現を楽しんでいる姿から子どもたちの興味関心の強さを感じた。また、決めた振り以外にも曲に合わせて自分なりの身体表現をする子や、互いに教え合う姿もみられた。またねらい通り、遊びの中で繰り返し行っているうちに歌や振りを自然に覚えていき、1週間もすると子どもたちの中にそれが浸透してきた。

### 【事例5】人に見られると辞めてしまう恥ずかしがり屋のE子

仲良しの友だちの前ではのびのびと自分を表現し、ごっこ遊びではお母さんやお姉さんなど役になりきり遊ぶ姿が見られ、本来はとても活発で歌や踊りが大好きなE子。しかし、恥ずかしがり屋なため、心の中ではやりたい気持ちがあっても、集団の中では動きが止まってしまう自分を表現できなかった。しかし、コーナー遊びのひとつという環境設定で、やりたい子どもだけが好きな時に参加できるため、E子も人に見られているという意識を持つことなく、連日友だちと一緒に色々な役になり大きな声で歌い、踊り、自分をのびのびと表現し楽しんでいった。又、抜群の記憶力で3役それぞれの歌と振りを覚え、それを他児に教える姿も見られた。

### (4) 役決めの様子

子どもたちが遊びの中で十分に身体表現を楽しみ、充足感を味わった次の段階として以下のねらいでクラス毎に自分の好きな役になりストーリーの流れに沿って表現することを始めた。

<ねらい>

- ・ごっこ遊びという意識の中で、ストーリーの流れを自然に身体で覚え、親しみを持つ。
- ・毎回自分のやりたい役になりながら自分を表現し、役それぞれの特徴や良さ、面白さを知る。

ここでは毎回違う役になり、それぞれの役のキャラクターを演じることを楽しむ子、心に決めた役をやり続ける子、自分の性格とは違うキャラクターを演じ自分を表現する子、必ず仲良しの友だちと一緒に役を選ぶ子など、毎回子どもなりに考えて役を選ぶ姿が見られた。このようなごっこ遊びを繰り返すうちに子どもたちから「泉を作らなきゃ」「張り紙を書かないと」などの声が上がリ、劇の中で必要と思われる道具のアイデアが出てきた。保育者は子どもたちの中で役に対するイメージが生まれ始めていると感じ、ごっこ遊びの域からオペレッタを演じるという次のステップにいくチャンスと捉え、出てきたアイデアを集まりの時間にクラス全体へ伝えた。すると、「何の役か分かるようにお面を作ろう」などのアイデアが子どもたちから出てきた。このことから、個々の子どもがストーリーや各役の面白さを理解していると判断し、「お面を作るならそろそろ役を決めなくてはいけないね」と役決めへの投げかけをした。子どもたちは「この役のこういう所が好きだから」「この役はこういうところが面白いからやる」などと明確な理由を持って役を決める姿が見られた。一方、「○○ちゃんと一緒にいいからやっぱりこの役に変える」など、自分のやりたい気持ちと友だちとの間で気持ちが揺れ動いている姿も見られた。しかし、どの子どもにも共通しているのは、ごっこ遊びの中で色々な役を十分経験し、それぞれの役の面白さを知った上で自分自身が納得をして役を選んでいるという点であった。お面作りにおいても、「描けない」という子はおらず、どの子も役に対するイメージを持っていることを実感した。子どもから出てきたアイデアを基に、何を作るか、必要な材料は何かを話し合い、好きな遊びの中でやりたい子が道具・小道具作りを行った。普段は製作に興味のない子も多く参加し、自分たちのイメージが具体化する喜びと楽しさを味わいながら積極的に行っていた。

#### 【事例6】初めから役を心に決めていたF子

自分の考えた振りが採用され、「自分がてんとう虫の振りを考えた！！」という思いが強くあり、以来自分の役に誇りを持ち、一貫しててんとう虫の役を演じていた。ごっこ遊びの中でもてんとう虫の音楽が聞こえるとすぐに遊びを辞め、歌い、踊っている姿がみられた。お面作りでも、自分のイメージ通りに描けるまで2枚ほど描き直し、思い入れのある分丁寧に描き、大きなてんとう虫のお面を作り上げていた。

#### 【事例7】自分の気持ちを我慢するG子

役決めの時バツタの人数が少なかったため、保育者から子どもたちに役の移動を投げかけた。G子は、「私やる」と一番に名乗りを上げた。しかし、保育者は日頃から自分の気持ちを我慢して、思いを抑えてしまうG子の性格を理解していたため、「この役で決まってしまうけど本当に良いのか？」「本当にやりたい役を選べば良いので、我慢してまで移らなくて良い」という旨を伝えたが、それでもG子は「バツタでいい」と発言した。しかしリハーサル直前になり、本当はてんとう虫が良かったと保育者に訴え、家でも母親に同じ事を話していた。そのた

め保育者は、役を代わってくれたことや本児の歌や踊りをみんなの前で褒めたり、その役の面白さを伝えて気持ちを盛り立てる一方、我慢せずに自分の気持ちに正直になることの大切さも伝えた。その結果、バッタの役の楽しさや良さもごっこ遊びの中で感じていた本児は、納得してバッタの役を演じ、本番は役になり切り楽しんでた。

#### (5) リハーサルから本番に向けての様子

この頃になると、他学年がホールで活動しているのを見る機会が多々あり、自分たちのオペレッタも「誰かに見てもらいたい」という意識が芽生え、意欲的に練習をする姿が見られるようになった。一方、表現活動に参加しているものの、活動への興味・関心が薄くて集中力が続かず、関係ない話をしたりふざけたりする子もおり、活動に対する取り組みや意欲に個人差が感じられた。ここでは以下のようにねらいを設定した。

<ねらい>

- ・自分なりの参加の仕方での練習やリハーサルに参加し、人に見せることを意識して活動に取り組む。
- ・クラスの友だちと一緒に活動することの楽しさを味わう。

しかし子どもたちもリハーサルを通して、人に見てもらおうとはどのようなことなのかを理解し、人前で演ずる楽しさや心地良さを体験したと同時に、オペレッタという活動への見通しやイメージが持てるようになった。そのため活動への興味が深まり、個々に取り組む姿勢に変化が見られた。何より5歳児学年の演技が大変な刺激となり、「自分たちもあんな風にやりたい!」との思いが子どもの中に生まれ、その後の練習では「上手にやろう」「お客さんに聞こえる位大きな声で歌おう」など自分なりの目標を持ち、活動に取り組む姿が見られた。5歳児学年のように「皆で力を合わせて作り上げよう」という意識までは持てないものの、個々が自分のイメージを表現しながら、友だちと一緒に声を合わせて歌い演じる事の楽しさを感じているようであった。「あと〇日だね!」とクラスにあるカレンダーを見て本番を指折り数え楽しみにしている姿や、自ら遠方に住んでいる祖父母に「見に来て」と電話をする子どももおり、子どもたちのオペレッタに対する思いが深くなっている事を窺い知ることができた。

当日は子どもたちの生き活きとした表情が印象的であった。本番を終えた子どもの姿や表情からは「楽しかった」「やりきった」という達成感のような物を感じることができた。「お客さんが沢山いて緊張した」「楽しかった、もう1回やりたい」という子どもの声や、本番後も遊びの中で劇ごっことして飽きることなく演じ、余韻を楽しむ姿が見られた。この活動を通して表現することの楽しさを存分に味わったと同時に、その印象が子どもの心に大きく残っていることを確信した。また、クラスでは以前はあまりかかわり合いのなかった子どもが一緒に遊ぶ姿や、集団で鬼ごっこなどをして遊ぶ姿が見られるなど、クラスの子どもたち同士の連帯感が感じられるようになった。

#### 【事例8】オペレッタに強い思いのあるI子

普段はおとなしく自己主張をあまりせず、自分の思いを言葉で表現しないI子であるが、歌

や踊りが大好きで、オペレッタでは自分を伸び伸びと表現し、積極的に参加する姿があった。5歳児学年にいる兄の影響もあり「両親が見に来てくれる」「お客さんが来る」と先の見通しを持っていて、同じ役の中でふざけている子どもやお喋りしている子どもがいると「ふざけないで」「真剣にやって」と大きな声で他児に注意する姿が見られた。普段このような姿を見せる事が無い為、本児のこのオペレッタに対しての真剣さや強い思い入れが感じられた。

#### 【事例9】自分なりの方法で参加していたJ男

集団行動が得意ではないJ男は、話し合いや活動などにはあまり興味を示さず、1人で違う事をしたり、歌ったり踊ったりせずただその場に座っている事が多かった。しかし、全ての役の歌とその順番を覚えると家で母親や姉に歌って聞かせたり、一緒に劇をするよう誘い、教えていたという話を母親から聞いた。また本番終了後も、それぞれの役の歌を歌い続けていた姿から、集団の中では自分を表現していないように見えても、皆と一緒にその空間にいて雰囲気や空気を共有し、自分なりの方法で間接的に活動を楽しみ、参加していたことを感じた。また、その子どもなりの楽しみ方、参加の仕方があるのだということが彼の姿から理解できた。彼にとっては友だちと一緒に一つのことを行い、共感する楽しさを知る機会となり、今後の集団生活への足がかりになったように思う。

#### 4. まとめ

私たちが何よりも心がけたことは、この「子ども劇場」という活動が普段の保育から突出したものになってはいけない、子どもにとって特別な活動ではなく、あくまでも普段の保育の延長線上にある活動でなければならないということである。そのため、ストーリーや登場人物は日頃から子どもの姿を観察し、日常の中で子どもたちが何に対して興味関心があるのかを把握し、内容も子どもが理解しやすい単純なストーリーにした。そして「保育者主体」ではなく、「子ども主体」という観点の基、活動に対して子どもに主体性をもたせるため子どもの考えや意見を大切にし、イメージを引き出し、一緒に作り上げていくことを大切にしたい。自分の意見が反映され、イメージが具体化していく喜びや楽しさ、面白さを体感すると同時に、「自分たちが作った」「自分たちが考えた」という意識が子どもたちの中に強く芽生え、活動に主体性を持たせ「子ども主体」の活きた活動に繋がったと考える。遊びの中で個々の子どもが色々な役を経験し、ストーリーの内容やそれぞれの役の特徴や面白さを感じ取り、自分なりのイメージを持って表現できるよう十分に時間をとり、ごっこ遊びの段階を大切にしたい。

その結果、遊びの中で一人ひとりが好きな役を心ゆくまで楽しみ、歌い、踊り、直接的に表現を楽しむ子どもの姿もあれば、歌の歌詞を自分の自由帳に書き写す子ども、遊びの中でお面を作る子どもなど、間接的に表現を楽しんでいる子どもの姿もあり、様々な形でその子どもなりの表現を楽しむ姿があった。役を決める時には自分なりの理由や考え、イメージを持って決めることができた。大道具や小道具などもイメージができていたため、その子どもなりの個性ある作品に仕上がった。このオペレッタ本番までの子どもの意識や意欲は、個々が今までの園

生活の中で経験し、学び、培ったものを動きや歌を通して十分に表現できる機会であったと考える。同時に、ストーリーに対し個々がイメージを持ち、それを表現することを楽しみ、また一つの活動に対し友だちと共通のイメージを持ち、共感しながら行う楽しさやそれに向かう過程の楽しさ、充実感、達成感というものを子どもたちは無意識ではあるが個々のレベルで学び、感じ、そして経験したのではないかと思う。この経験が子どもの心の片隅に残り、5歳児学年での生活や活動に生きて来るものと確信している。

(大勝 愛, 室井 真紀子, 田中 香織)

(2008.12.10 受理)